

曹操



孟徳
（幼）阿瞞公 武帝
一五五〜二〇〇

豫州沛国譙県

武帝紀魏書一

魏の太祖。祖父の曹騰は、桓帝擁立に功績があり、宦官でありながら、多くの人材を抜擢した。無名の曹操を評価し、その理想となる橋玄を推挙した種暲は、その一人である。父は夏侯氏から養子に入ったとされる曹嵩で、太尉に至った。

熹平三（一七四）年、曹操は二十歳で孝廉に推挙されて郎となり、洛陽北部尉に任ぜられ、宦官の係累さえ処刑する猛政で名声を得た。一八四年、黄巾の乱が起こると騎都尉になり、潁川郡の黄巾を討伐して、濟南国相に昇進した。

中平五（一八八）年、靈帝が新設した西園八校尉の一つ典軍校尉に就任したが、翌年、董卓が献帝を擁立して政權を壟断すると、陳留郡で挙兵する。一九〇年、反董卓連合において曹操は、袁紹から行奮武將軍に推薦された。かつて橋玄の紹介により、許劭の人物評価を受けた曹操は、何顛を中心とする名士グループで袁紹・荀彧・許攸らと交友していたためである。袁紹が董卓と戦わない中、曹操は洛陽への進撃を唱えたが、滎陽の戦いで、董卓の中郎將の徐栄に敗れた。それでも、漢の復興のために董卓と戦ったことは、のちに献帝を擁立する正当性

政治的正統性となる献帝を有し、河南の豫州・兗州を支配して、袁紹と全面的に戦い得る態勢を整えた。

建安五（二〇〇）年の官渡の戦いでは、降服してきた旧友の許攸が立てた烏巢急襲策を採用して勝利を納めた。ただし、その勝利は、許で献帝を守り、兵糧を供給し、名士間のネットワークを活用して袁紹陣営の情報を取集・分析した荀彧の功績に大きく依存する。この時期、曹操と荀彧は、志を共にしていた。

ところが、建安十三（二〇八）年、赤壁の戦いに敗れ、五十八歳の曹操が中国統一より、君主権力の強化と後漢に代わる曹魏の建国を優先すると、両者の関係は悪化する。董昭から曹操を魏公に推薦する相談を受けた荀彧が、儒教的理念を掲げてこれを非難すると、両者の対立は決定的となった。同十七（二二二）年、孫権討伐の途上、曹操は荀彧を死に追い込む。

曹操は、名士の価値観として絶対的な位置を持つ儒教が漢を正統化していたことを嫌い、儒教の相対化を目指す。儒教とは異なる価値観を尊重することで、儒教に圧力をかけていく。荀彧を死に追いやった二年前、曹操はすでに人材登用の方針として、儒教の登用方針とは異なる唯才主義を掲げていた。さらに曹操は「文学」を宣揚する。曹操のサロンから発展した建安文学は、中国史上初の本格的な文学活動となった。曹操は、五官将文学など「文学」を冠する官職を創設し、また文学の才能を基準に人事を行った。さらに、文学の才に秀でた曹植を寵愛し、

を支え、漢の護持を願う名士に曹操の存在を知らしめた。

河北を制圧していく袁紹を見て、曹操は黄巾の盛んな河南に出る。一九二一年、兗州牧となり、青州黄巾を破って、兵三十万、民百万を帰順させる。これを編成したものが、曹操の軍事的基盤となった青州兵である。このころ荀彧が加入する。名士本流の荀彧が、袁紹を見限り曹操に仕えたことにより、多くの名士が集団に参入し、曹操は順調に勢力を拡大した。それを嫌った袁術の侵入に反撃すると、徐州牧の陶謙が曹操の父を殺して報復する。公孫瓚・陶謙・孫策の袁術派と曹操・劉表の袁紹派とが抗争していたためである。親を殺された曹操は、民を含めた大虐殺を行い、名士に失望される。焦った曹操が虐殺を批判した兗州名士の辺讓を殺害すると、陳宮と張邈は呂布を招き、曹操に敵対して兗州をほぼ制圧した。

荀彧は、程昱・夏侯惇と共に拠点を死守した。一年余りをかけて兗州を回復した曹操に、荀彧が正統性の回復策として献帝の擁立を主張する。一九六六年、献帝を迎えた曹操は、名士の支持を次第に回復した。さらに、荀彧は、兗州にあった拠点を豫州の潁川郡許昌に移すことを勧める。曹操は、許に都を置くと共に、周田を屯田制を始めた。軍隊ではなく、一般の農民に土地を与える民屯は、隋唐の均田制の源流となる。また、戸ごとに布を調として取る税制は、租庸調制の源流となっていく。

こうして曹操は、軍事的基盤の青州兵、経済的基盤の屯田制、

一時は後継者に擬することもあった。文学は、こうして儒教とは異なる新たな価値として、国家的に宣揚された。曹操の著した楽府は、自らの正当性を奏でる手段であった。

荀彧を殺した翌建安十八年、曹操は魏公に封建され、九錫（天子に匹敵する九種の礼）を受けた。魏国の社稷と宗廟を建て、二人の娘を献帝の夫人とした曹操は、同十九年に献帝の伏皇后を廢位し、伏皇后の二子も殺害する。二十年、娘の曹節を献帝の皇后に立てると、二十一年に魏王の位に即く。

建安二十五（二二〇）年一月、魏王曹操は、洛陽で薨去すると、高陵（西高穴二号墓とされる）に葬られた。

曹操は儒教一尊であった後漢の価値基準を打破して、多くの文化に価値を見出した。『孫子』に注を付け、新しく作った楽府を管弦にのせて唱和させた。また、草書と囲碁を得意とし、五斗米道に興味を抱き、養生の法を好み、方術の士を招いた。

曹操の存在の故に、三国時代は歴史の転換点となった。政治的には、四百年の統一国家である漢が崩壊し、三百七十年に及ぶ魏晉南北朝の分裂の中で、名士を母体とする貴族が支配階級となる。経済的には、隋唐律令体制に結実する屯田制などの土地制度や税制が整備される。文化的には、儒教一尊は崩壊し、仏教・道教が盛んとなり、文学・書画が新たな価値として定着していく。これらはすべて曹操に源を発するのである。

〔陳寿〕「非常の人、超世の傑」と、その才能を高く評価する。